

研究ノート

知的障害や発達障害者に対するスティグマティゼーション是正への取り組み —当事者とともにつくるサポーター講座—

Practice for reducing stigma toward people with intellectual and developmental disabilities.

米倉裕希子

要約：【目的】知的障害や発達障害者の地域生活の実現には、家族および地域住民の理解と支援が必要不可欠であり、地域住民の障害者に対するスティグマ是正への取り組みが必要である。本研究の目的は、知的障害や発達障害者との接触経験および障害に関する知識の伝達を含んだ地域住民を対象にしたスティグマ是正の実践プログラムの開発を目指し、試行的に実践したプログラムの評価である。【方法】対象者は、A町社会福祉協議会で開催された「当事者とともにつくるサポーター講座」の講座参加者で、知的障害や発達障害の知識や対応などについての自信度を講座の前後で比較した。【結果】分析対象者は13名だった。発達障害の方が知的障害よりも自信度が低い傾向がみられた。また、講座後は、知識や対応、地域での生活において自信度が高まる傾向がみられたが、気持ちの理解においてはあまり変化が見られなかった。【考察】講座に参加することで、知識や対応の自信を高め、その結果、障害者との地域生活への自信につながったと考えられる。講座は、知識の伝達にとどまらず、多様かつ継続的な接触経験をする場を設け、障害当事者や家族など多様な立場の人が参加することが望ましい。また、発達障害は精神障害と同様に見えない、とらえにくい特質上、スティグマを受けやすいかもしれないので、取り組みの強化が必要である。今後は、さらに対象者を増やし、プログラムの効果を検討していくとともに、様々な場所や対象者に応用可能で、より簡便で効果のあるプログラムの検討も必要だろう。また、プログラムの効果を検証するアウトカムの開発が望まれる。

Key Words：知的障害 発達障害 スティグマ

I. 研究背景

ノーマライゼーションの浸透とともに、我が国においても、在宅サービスを利用しながら地域生活を希望する障害児・者のニーズが高まってきている。障害児・者の地域生活の実現には、家族および地域社会の理解が不可欠である。

筆者らは、これまで障害児・者の地域生活において家族が大きな影響をもつと考え、家族支援の根拠を明らかにするため、知的障害や発達障害の子どものいる家族研究を進めてきた。知的障害児・者の親の会の会員を対象にしたアンケート調査の結果から、家族の多くが将来に対する不安を抱えていることがわかった¹⁾。学齢期の知的障害や発達障害児の家族を対象にした研究では、家族の高い感情表出は、将来に対する不安や子どもの行動特性からもたらされており、高い感情表出は家族の心の健

康と関係していることが明らかになった²⁾。これまでの研究から、家族の将来に対する不安を緩和させていくことが重要であり、そのためには、フォーマルな社会福祉制度および福祉サービスの充実はもちろんのこと、インフォーマルな職場、隣人、友人など地域住民の協力と理解が得られる環境の充実が必要である。

一方で、障害者の地域生活を支える基盤となるグループホームやケアホームなど施設建設に地域住民が反対運動を起こし、建設を断念したり、地域から離れた場所へ移転したりするなどの施設コンフリクトが今もなお後をたたない現状にある。このようなコンフリクトは、障害者に対するスティグマからもたらされる障害者差別であり、それ自体人権といった観点から許されるものではない。

ここでスティグマの定義について整理しておく。スティグマは、古代ギリシャ語で奴隷や、犯罪者、謀反人であることを示すための刻印を意味しており、それが社会的烙印の意味として用いられるようになった。ステイ

グマの概念を最初に体系化したのは、米国社会学者の Goffman であるといわれている。

山口ら³⁾は、とくに精神障害者へのスティグマは、他の障害に比べ見えにくい病気という特質上深刻な問題となっていることから、精神障害者に対するスティグマの悪影響をまとめている。スティグマの問題は、わが国だけの問題ではなく、国際的な共通課題でもあると述べた上で、精神障害者に対するスティグマとは、(1) 精神障害者に関する知識(無視)、(2) 精神障害者に対する否定的な態度(偏見)、そして(3) 差別(行動)を含んだ広い言葉であり、スティグマは、セルフ・エスティームの低下、社会的ネットワークの減少、住宅問題、余暇活動、保険、就労の困難等に関係しており、社会的排除や社会的孤立をもたらすため、スティグマ是正の実践を進展させることが必要である。

知的障害や発達障害者へのスティグマについても精神障害と同様の影響があると考えられる。特に発達障害は精神障害と同様にわかりづらいという特質を有している。

国内において知的障害や発達障害者へのスティグマに関する研究はあまりなく、藤井⁴⁾の知的障害者家族への質問紙調査から、家族が受けるスティグマ化の要因を分析した研究のみである。藤井は、家族が受けるスティグマ化の要因として(1) 親の受けた教育や社会体験、(2) 障害告知の際の配慮、(3) 障害受容の困難性、(4) 家族の孤立感、(5) 相談機関にかかわる人の態度のあり方、(6) 周りの人の偏見を挙げており、その要因を取り除くためには、知的障害者本人への直接的・具体的な支援、家族への継続的な心理的支援、本人および家族が気軽に相談できる人や場所の存在、地域の人々の理解などが必要であると述べている。

地域社会あるいは地域住民の知的障害者に対するスティグマに関する研究はないが、知的障害者への態度に関する研究はいくつか存在する。生川ら⁵⁾は、知的障害者に対する態度に関する先行研究を分析し、性、接触経験、その他の要因に分けて述べている。態度に影響を及ぼしている要因として、(1) 性差がないといった研究もあるが、女性の方が男性より知的障害者に対して好意的な結果が多い、(2) 接触経験と態度との関連性が認められないという研究もあるが、接触経験と知的障害者に対する好意的態度が結びついているという研究が多い、(3) 知的障害についての知識と態度に関しては定まった研究結果が得られていない、などのことがわかっ

ている。

スティグマの是正は、障害者およびその家族だけでなく、専門家、そして地域住民へアプローチしていくことが必要である。それでは、スティグマ是正のアプローチとは具体的にどのようなことが挙げられるだろうか。

英国においては、当事者団体、政府、民間基金団体との連携で、精神障害者に対するスティグマ是正を図るナショナル・メディア・キャンペーンが行われており、バスやローカルラジオやローカル誌、コースターやポストカード、ストリートアートなどを用いた広報活動や、精神障害の経験のあるスタッフが配置された場の提供などの活動を行っている⁶⁾。

小澤⁷⁾は、施設コンフリクトをなくすために、良好な関係を築いていた事例の分析から、長期的な学習により、地域住民が施設や障害者自身との関わりによって、共感的な障害者観を築くことが重要であると述べている。そのためには、障害者の人格にふれるような理解の進め方と実際に障害のある個人と接する体験を積んでいく啓発活動が必要であり、具体的な内容として、障害者自身を講師とした講演、研修や障害者の利用している施設や身近に障害者が通所している場所等におけるボランティア活動を組み込むことを挙げている。

以上のような背景から、障害者の地域生活を進めていく上で、家族および地域社会の理解は必要不可欠であり、地域社会における知的障害や発達障害者へのスティグマを是正する実践が必要である。スティグマを是正する実践は、障害についての知識や情報だけではなく接触経験をとり入れることが有効であると考えられる。

よって本研究の目的は、知的障害や発達障害者との接触経験および知識の伝達を含んだ地域住民を対象とするスティグマ是正の実践の開発を目指し、試行的実践の検討を行うことである。

II. 研究方法

1. プログラムの内容

地域住民を対象としたスティグマ是正の実践として「知的障害&発達障害のある方への支援を学ぶ-当事者とともにつくるサポーター講座-(以下、「講座」)」を、地域福祉推進の中心機関である社会福祉協議会と共同して計画、実践した。

講座は、全5回、それぞれ約2時間半で、講座は、知識や技術を学ぶ講義を2回、実際の対応を学ぶ実践を2回、振り返りの1回で構成した(表1)。プログラムを

構成する上で、工夫した点として次の4点があげられる。

(1) 知識の伝達：専門家が知的障害や発達障害の特性や支援方法等の専門的な内容をわかりやすく説明するだけでなく、実践現場で働く専門職が実際の場面に則した話を行った。

(2) 障害者本人や家族を講師とする研修：障害者本人や家族がどのように支援してほしいか、何を望んでいるのか講師となって話をする。

(3) 障害者との多様な接触経験：障害者のアロマセラピストによるハンドケア、就労支援事業所の喫茶店での障害者による喫茶サービスを体験し、肯定的な接触経験を積み重ねる。

(4) 地域の障害者施設の利用：講座の開催場所を入所施設内のホールや通所施設内の喫茶店で行い、身近に感じてもらえるよう配慮した。

表1 講座の内容

日時	講義タイトル	内容
第1回	講義 「障害と特性」	知的障害および発達障害の特性 知的障害のある本人の語り 障害者アロマセラピストによるセラピー
第2回	講義 「障害と対応」	障害のある人への支援や対応方法 障害のある子どもの家族の語り 障害のある方による喫茶サービス
第3回	参加型授業 「実践しよう①」	知的障害のある方への学習支援を通して学ぶ
第4回	参加型授業 「実践しよう②」	知的障害のある方とのスポーツ活動を通して学ぶ
第5回	演習 「振り返り」	振り返りのグループワーク なんでも相談室

2. 対象

研究対象者は、A町社会福祉協議会と共同で実施したサポーター講座の受講生である。A町は、人口約2万人の町で、そのうち療育手帳保持者は約100人ほどである。また、ボランティアセンター登録者が約800人いる。

講座の受講生は、社会福祉協議会を通して、地域住民に回覧板にて広報した。また、町内にある福祉系大学において宣伝してもらった。その結果、地域住民、障害のある子どもの家族、A町にある福祉系大学へ通う大学生など16名の申し込みがあった。

3. 評価方法

実践を評価するため、筆者が作成した質問紙を講座の前後で実施し、前後の変化を評価した。質問項目は、知的障害と発達障害それぞれについて、「障害についての知識」「障害特性への対応」「障害者の気持ちの理解」「地

域での生活」について、それぞれ「全然自信がない」「あまり自信がない」「少し自信がある」「まあまあ自信がある」「かなり自信がある」の5段階で評価してもらった。講座後のみ「障害者に対する意識の変化」「障害者との距離」について聞いた。また、毎回講座の満足と感想を自由に記入してもらった感想シートを配布した。

4. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉大学社会福祉学部倫理審査委員会に研究計画を提出し、承認を得ている。インフォームドコンセントの観点から、(1)実施機関へ研究の趣旨及び方法を説明し承諾を得る、(2)講座申込者へ説明文を配布した上で、一人ひとり研究の趣旨および方法を口頭で説明する、(3)同意書に署名した人のみを分析対象とする、などの倫理的配慮を行った。

III. 研究結果

1. 対象者の概要

講座申込者16名のうち分析対象者は13名である。女性11名、男性2名だった。

13名のうち、知的障害者との関わりが「ある」11名、「ない」2名だった。一方で発達障害者との関わりは「ある」が9名、「ない」が4名だった。

2. 障害別での比較

講座前のアンケートについて知的障害と発達障害を比較したところ、「障害についての知識」「障害特性に合わせた対応」「気持ちの理解」「地域生活への理解」全ての項目に置いて知的障害者よりも発達障害者の方が「自信がない」と答えた人の割合が多かった。

表2 障害種別による比較（講座前）

	全然 自信がない	あまり 自信がない	少し 自信がある	まあまあ 自信がある	かなり 自信がある
障害についての知識					
知的障害 (N=13)	0	8	3	2	0
発達障害 (N=12)	2	8	0	2	0
障害特性に合わせた対応					
知的障害 (N=12)	2	8	1	1	0
発達障害 (N=12)	4	6	1	1	0
気持ちの理解					
知的障害 (N=12)	2	5	3	2	0
発達障害 (N=13)	3	6	2	1	0
地域生活への理解					
知的障害 (N=12)	0	4	5	2	1
発達障害 (N=12)	0	7	3	1	1

3. 講座前後での比較

(1) 障害についての知識

障害についての知識に関する自信を知的障害、発達障害、知的障害と発達障害の違いについてそれぞれ5段階で聞いたところ、講座後、「少し」あるいは「まあまあ」自信がある人が増え、自信がないと答えた人でも、「全然」から「あまり」へとほとんどの人で自信度の段階が上がった(表3参照)。

(2) 障害特性に合わせた対応

障害特性に合わせた対応についての自信度を、知的障害、発達障害それぞれ5段階で聞いたところ、講座後、「少し」あるいは「まあまあ」自信のある人が増えた(表3参照)。

(3) 障害者の気持ちの理解

障害者の気持ちの理解に関する自信度を、5段階で聞いたところ、知的障害者では講座前後であまり変化がなく、発達障害では講座後、自信のない人が増えた(表3参照)。

(4) 障害者との地域生活

障害者との地域生活に関する自信度を知的障害および発達障害それぞれ5段階で聞いたところ、講座後、「少し」あるいは「まあまあ」自信のある人が増え、知的障害で

表3 講座前後の自信度の変化

		全然 自信がない	あまり 自信がない	少し 自信がある	まあまあ 自信がある	かなり 自信がある
障害についての知識						
知的障害	講座前	0	3	2	2	0
	講座後	0	2	1	4	0
発達障害	講座前	2	2	0	2	0
	講座後	0	4	0	2	0
障害の違い	講座前	2	3	1	1	0
	講座後	0	2	3	2	0
障害特性への対応						
知的障害	講座前	0	4	1	1	0
	講座後	0	1	3	2	0
発達障害	講座前	2	2	1	1	0
	講座後	1	2	2	1	0
障害者の気持ちの理解						
知的障害	講座前	0	2	3	1	0
	講座後	0	2	3	1	0
発達障害	講座前	1	2	2	1	0
	講座後	1	3	1	1	0
障害者との地域生活						
知的障害	講座前	0	1	4	1	0
	講座後	0	0	3	3	0
発達障害	講座前	0	3	2	1	0
	講座後	0	1	2	3	0

表3 「障害者」への変化(講座後)

	全く 変わらない	あまり 変わらない	少し 変わった	まあまあ 変わった	かなり 変わった
意識の変化	0	3	2	2	0
	全く 思わない	あまり 思わない	少し 思う	まあまあ 思う	かなり 思う
距離の変化	0	2	2	1	2

は全ての人が「少し」あるいは「まあまあ」自信があると答えた(表3参照)。

(5) 障害に対する意識の変化

障害者に対する意識の変化は、「少し」あるいは「まあまあ」変わったと答えた人が半数以上いた。また、障害者との距離が近づいたと思う人も7割以上いた(表3参照)。

IV. 考察

知的障害および発達障害児者の家族のスティグマを是正するには、本人、家族、専門職、地域社会それぞれへの実践的アプローチが必要であるといわれている。地域社会における知的障害者へのスティグマを是正する実践として、知的障害についての知識や情報および接触経験を取り入れたサポーター講座を実施し、講座前後で障害者に対する意識の変化を評価した。

本講座に参加した受講生の傾向をまとめると、講座前後を比較して、

- (1) 障害に対する知識の自信が高まった
- (2) 障害特性への対応への知識が高まった
- (3) 障害者の気持ちの理解に対する自信にはあまり変化がなかった
- (4) 障害者との地域生活への自信が高まった
- (5) 講座に参加し、障害者に対する意識および距離の変化が見られた

といった結果が得られた。

また、知的障害と発達障害とでは、発達障害の方が知的障害よりも自信がないといった傾向もみられた。

本研究は、実践研究であり、講座参加者に丁寧に関わりたいという観点から、講座の定員を15名程度として実施した。そのため、統計学的に有意な差といえるような分析対象者が得られなかった。今後、このような実践を繰り返し行い、分析対象者を増やしていき、効果の検証をしていく必要がある。また、講座参加者は自ら知的障害や発達障害に関心をもち講座を申し込んできており、無作為に抽出された対象者ではないため、もともと

障害に対するスティグマは強くないと考えられる。さらに、標準化されたアウトカムを用いた評価ではない。

上述したような研究の限界を踏まえうえて、本調査において得られた結果からスティグマ是正の実践について具体的内容を考察する。

毎回の講座終了時に内容の満足を聞いたが、全回において全ての人が、「とても良かった」「良かった」と回答しており、自由記述においても多くの人が「とてもわかりやすい」「具体的な事例でわかりやすかった」と書いてあった。とくに、障害についての説明や対応方法は、事例を用いて具体的な話をし、講義形式ではなく、演習形式で行った。

講座では、様々な形の接触経験を取り入れた。障害者のアロマセラピストによるハンドケアや就労支援事業所の喫茶店での喫茶サービスでは、「きもちよかった」「おいしかった」といった感想から、「またして欲しい」「また食べにきたい」などへつながり、障害者からケア（サービス）を受けるという価値の転換にもつながったと思われる。さらに、スポーツやレクリエーションなどにも活動する機会も取り入れた。これらの活動でも「楽しかった」の感想が多く聞かれ、「またこのような機会があれば参加してみたい」につながっていた。今回の講座参加者の年齢層は幅広かったため、大学生と一緒に身体を動かす接触経験が、年齢層の高い方では喫茶などの接触経験が良かった様子が講座後の感想からうかがえた。さまざまな形の接触経験を用意しておくことが望ましい。

講座では、研究者、障害当事者、障害者の家族、実践現場で働く職員などさまざまな立場からの話を聞く機会を設けた。講座参加者の中には、初めて障害者と接する人、将来、障害者施設で働きたいと考える学生、身近に障害者のいる家族など様々な人がおり、講座後の感想から、自身の立場や経験に重ね合わせ、共感しながら聞いていたことがうかがえた。

一方で、最終回の「振り返り」への出席者が少なく、接触経験の中で感じた疑問や対応の悩みのフィードバックが十分だったとはいえない。接触経験は多くもったものの、一人の個である障害者とじっくり時間をかけて関係を形成する機会をもつことはできなかった。そういった点が障害者の気持ちの理解の自信を高めることにつながらなかったのではないと思われる。さまざまな形の接触経験は断片的な接触経験にもなる。個の障害者と関係を形成する継続的な接触経験の検討も必要だと思われる。

また、知的障害者と発達障害者では違いがみられた。事前の接触経験も発達障害の方が知的障害より少なく、自信も低かった。精神障害者へのスティグマは、他の障害に比べ見えにくい病気という特質上深刻な問題であると考えられるが、本講座参加者においてもその傾向がみられた。とくに、発達障害に対するスティグマの取り組みは強化していく必要があるかもしれない。

V. おわりに

現在、厚生労働省は、「認知症を知り地域をつくるキャンペーン」の一環として、「認知症サポーター100万人キャラバン」事業を実施している。この事業は、認知症になっても安心して暮らせるまちになることを目指し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する「認知症サポーター」を全国で100万人養成することを目標にしている。地域住民、金融機関やスーパーマーケットの従業員、小・中・高等学校の生徒など様々な場所で開催される認知症サポーター養成講座に参加すると認知症サポーターになることができる。平成17年度からはじまり、平成23年度3月の時点で、すでに100万人を超え、約250万人の認知症サポーターが誕生している⁸⁾。同様に、障害者が安心して地域で暮らせるまちづくりを目指し、行政主体の大規模なアンチ・スティグマ・キャンペーンが実施されることを期待したい。

今回の講座は、試行的なプログラムとして実施した。今後、さらに対象者を増やし、実践の効果を検討していくとともに、さまざまな場所や対象者に応用可能で、より簡便で効果のあるプログラムの検討も必要だろう。本研究では、筆者が任意に作成した質問紙を用いたが、実践の効果を検討していくためには、知的障害や発達障害に対する地域住民のスティグマを評価するアウトカムの作成が必要である。

そして、障害者の地域生活が当たり前のものとなり、このようなスティグマ是正の取り組みが必要ない状況、接触経験をプログラムに取り入れなくとも接触する機会がある状況、そのような地域社会になることが望まれる。

謝辞

調査にご協力いただきました社会福祉協議会および各関係機関の施設長ならびにスタッフの方々、講師をしてくださいました障害当事者およびそのご家族の方々に感謝いたします。そして講座に参加いただき、調査にご協力くださいました皆様におひとりおひとりに心から感謝

いたします。

文献一覧

- 1) 米倉裕希子, 水谷正美, 和田知美. 知的障害者の家族のニーズ研究－中播磨地区手をつなぐ育成会アンケート報告－. 近畿医療福祉大学 2010; 10: 1 - 12.
- 2) 米倉裕希子, 三野善央. 障害のある子どもの家族支援－児童デイサービスを利用している家族のEEとQOL－. 近畿福祉大学紀要 2006; 7: 141 - 149.
- 3) 山口創生, 米倉裕希子, 周防美智子他. 精神障害者に対するスティグマ是正への根拠：スティグマがもたらす悪影響に関する国際的な知見. 精神障害とリハビリテーション 2011; 15 (1): 75 - 85.
- 4) 藤井薫. 知的障害者家族が抱くスティグマ感－社会調査を通して見たスティグマ化の要因と家族の障害受容. 社会福祉学 2000; 41 (1): 39 - 46.
- 5) 生川善雄, 梅谷忠勇, 前川久男. 知的障害者に対する態度に関する文献検討－態度の多次元的研究に焦点をあてて－. 千葉大学教育学部研究紀要 2006; 54: 15 - 23.
- 6) Sara Evans-Lacko, Jillian London, Kirsty et al. Evaluation of a brief anti-stigma campaign in Cambridge: do short-term campaigns work? BMC Public Health 2010;10:339.
- 7) 小澤温. 施設コンフリクトと人権啓発－障害者施設に関するコンフリクトの全国的な動きを中心に－. 部落解放研究 2001; 138: 2 - 11.
- 8) 認知症サポーター100万人キャラバンホームページ (<http://www.caravanmate.com/>) (2011年12月1日)